専徳寺報

第451号
令和2年3月1日発行
浄土真宗本願寺派
専徳寺

〒740-0044 岩国市通津2764
☎0827-38-1124 FAX38-1000
http://sentokuji-iwakuni.net/ 専徳寺 検索

専徳寺納骨堂受付中

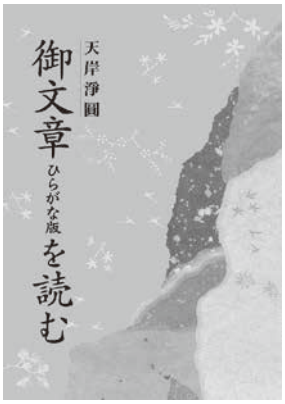
法座中止のお知らせ「春季讃仏会法要」

現在、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため多くの行事が延期、中止となっています。

つきましては今月十七・十八日に予定していました「春季讃仏会法要」ですが、やむなく中止とさせていただきます。また三月の仏婦の月例会（第二月曜日）、子ども会（第二月曜日）も同じく中止いたします。

なお次回の法座は、五月十九日・二十日（講師：北嶋文雄師）を予定しております。

如来・人・言葉 116



今月の法座のご講師は、大坂の天岸浄円先生でした。そこで法座聴聞のかわりに、天岸先生の著『御文章を読む』（2012年、本願寺出版）より、「睡眠章」の解説を掲載いたします。

まずは、下記にある蓮如上人69歳の「御文章」（お手紙の法語）、「睡眠章」のあらましをご覧くださってから次頁をお開きください。

『睡眠章』の大意

最近は、いつになく眠気をもよおします。その理由を考えますに、まちがいなく浄土往生のときが近づいたためと思われます。とどめようのないことですが、なごり惜しいかぎりです。

今日まで、「いつ往生のときがこようとも」と、油断なく心がけてまいりました。それにつけても、この私が亡くなった後も、たしかに信心が定まる人（お浄土へ往生する人）が、なくならないようにと願うばかりです。

私自身の往生については、何の心配もありません。しかし、人びとの気のゆるみには大きな不安がのこります。〝いのち〟のある間は、私たちはいつも油断なく生きるように心がけるべきです。何につけても、人びとの心がけ不足が気にかかります。

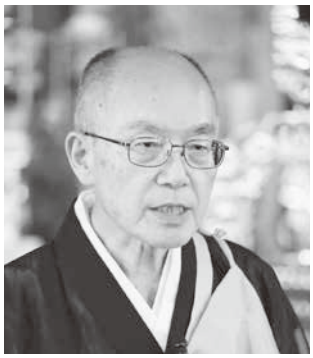
明日のしれない〝いのち〟です。〝いのち〟が尽きれば、すべてむなしいことです。〝いのち〟ある間に、少しでも早く仏法を聴聞し、阿弥陀仏のご本願を聞き、疑いを解いておかなければ、必ず後悔することになります。よく心得るべきであります。

【蓮如上人】

【法句】(241) 仏法には明日と申すことあるまじく候ふ。仏法のことはいそげいそげ（蓮如上人）

「睡眠章」の解説

天岸浄円



「油断」の語源は「仏典」

「油断」の語は、「気をゆるす」「タカをくくって、注意を怠る」とか、「怠ける」「物事をなおざりにする」という意味で、「油断大敵」などと、注意をうながすために使われます。

「油断」の語源には、さまざまな説があるようですが、『涅槃経』に次のように説かれています。

まず「仏道を求める者は、無常の〝いのち〟に緊張し、さまざまな誘惑に惑わされることなく、修行に集中すべきである」と述べてその心構えを喩え、

「ある国王が、二十五里四方の囲いの中に、大勢の人びとを集め、人為的に雑踏をつくりました。そして、国王は一人の家臣に油の入った鉢をもたせて『この鉢を持って雑踏を通り抜けよ。ただ、油をこぼすことは許さない。もし、一滴でもこぼしたなら、即座に汝の〝いのち〟を断つ』と、命令しました。さらに、もう一人の家臣には刀を抜かせて、鉢を持たせた家臣に付かせたのです。

鉢を持たされた家臣は、恐怖と緊張から、一瞬も心をゆるめることなく、雑踏のなかで起きる、さまざまな衝撃や障害にこころを遣いながら、緊張と集中力によって、雑踏を通り抜けることができた」という内容です。

仏道を求める者もこのように、自身が求めるべきものをハッキリと自覚し、さまざまな誘惑に心を乱すことなく、いのちがけの緊張感があれば、必ず目的を達成できるということです。

「生」を意識していますか

私たちは、「生」（生きていること）を意識しているでしょうか。毎朝、目が覚めたとき、「ああ、今日も生きている。ありがたいことだなぁ」と、新鮮な実感がありますか。正直いって、生きることに慣れてしまって、なにも感じないのではありませんか。

……今日まで生きてきたのだから、いつかは死ぬだろう。けれども、今日、明日と差し迫ったこととは思えません。

昨日があったように今日があり、今日があるように明日もある……と、明日のあることに疑いを持ちません。ですから、今日の日が、生涯のうちで、後にも先にもかけがえのない一日であり、とりかえしのつかない一日であると思えないのです。だからぼうっと過ごしています。実は、私たちはそのような誤解のなかで生きてきたのです。

緊張のない日々ですから、一番に為すべきことをせず、それを先送りして、二番、三番……、本当はどうでもよいことに没頭しつづけます。ようやく本当になすべきことに気づいたときには、既に時間がありません。

緊張と集中

「油断」なく生きるとは、このような緊張感と集中力に目覚めた生活です。

〝いのち〟に限りがあること、すなわ

ち「無常」を自覚するとき、〝いのち〟の風景が一変します。「無常」を知らないときは、生きることを当然と思っています。しかし、限りがあり、必ず終わりが来る。しかもいつ来るかしれない。……今日来ても不思議でない。このことを実感するとき、〝いのち〟は輝きはじめ、一日の重大さが自覚されてきます。

「無常」は、「はかなさ」「あきらめ」を意味する言葉ではありません。これは人生に対する緊張感を生ぜしめる、大切な言葉だったのです。

このことに気づくとき、この限りある人生をどう生きるか……、また、〝いのち〟を悔いなく全うするためにはどうするか……を、問わずにはおれなくなります。

その問いに正しく対応してくれるものが、「教え」なのです。「本願を信じ、念仏を申し、浄土に生まれる」とは、その生き方をあらわしているのです。

蓮如上人の心がけ

蓮如上人は「私自身の往生については、何の心配もありません（この分については、往生つかまつり候とも、いまは子細なく候）」と述べられています。

私の〝いのち〟がたった今終わっても、決して悔いはない、と言いきられています。この言葉は、わが人生に思い残すことなしと、生き抜かれた人の言葉といえます。

本願を信じ念仏申す者とは、常に阿弥陀仏を意識し、油断なく生きて、念仏をとおして教えの正しさ、尊さを自身の生涯において証せんとする者をいいます。それが信者の責任であると示しておられるのです。

真宗の「すくい」とは

本願を信ずるとは、阿弥陀仏を中心に生きる生き方が開かれてることです。また、必ず阿弥陀仏にあわせていただく人生を自覚することでもあります。

そこには、いい意味での緊張感があります。私たちは浄土に生まれさせていただき、阿弥陀仏におあいすることを実感しているでしょうか。……一度、おあいしたときのご挨拶を考えてみては……。

宗教、信仰をもつことは、ある意味では厳しい生き方であります。しかし、厳しくとも、それがなければ、たしかなよりどころをもたない、傲慢で愚かな、自我中心のむなしい生き方といわねばなりません。安逸な生活と真に豊かな生活とはちがうのです。

真宗の「すくい」は、死後に浄土に生まれることだけではありません。このような生き方を恵まれてること自体が「すくい」なのです。逆に言えば、このように、仏さまを中心に生きようとする信心が開けない人には、人生の充実はもちろん、死んだからといっても、お浄土が開かれることはないのです。

蓮如上人のご一生はご自身に対しても、また、縁ある人びとに対しても、常に「どのようにすれば信をすすめることができるか」をこころにかけ、油断を誡められたご生涯であったといえます。

（おわり）

寺内だより

●み仏にいだかれて〔葬儀勤修〕

1月14日御往生
青木　村本　竹男 様（91）
喪主　村本　敏夫 様

1月18日御往生
川西　太田尾富男 様（91）
喪主　太田尾雅博 様

1月19日御往生
藤生　土井　純子 様（70）
喪主　土井　利雄 様

1月30日御往生
海土路　松宮ヒナ代 様（96）
喪主　松宮　栄昭 様

2月4日御往生
藤生　土井　敏子 様（86）
喪主　土井　保英 様

2月17日御往生
本呂尾　村重　正直 様（70）
喪主　村重　理絵 様

2月28日御往生
川西　沖野ハルヨ 様（93）
喪主　沖野　圭二 様

2月29日御往生
多田　池田　勉 様（83）
喪主　池田　安夫 様

●ご恩を偲びました〔法事勤修〕（1月～2月）

【長野】三井一彦13、**【通津】**白田直則1、村井哲也7、市岡正己7、沼田信雄50、藤中芳子1、田中稔1・17、中本広志7、沖原健二1、和泉清子3、清水宏3、土井浩二3、藤川典雅7、**【保津】**藤崎健治17、西宮良子17、岡部守100、粟津節子100、藤崎克己100、**【青木】**広重範昭33、佐々辺鉄雄17・17、**【黒磯】**松脇克郎17、森本公之17、**【藤生】**白木規晴7、土井利雄3、蛭子義人1、**【南岩国】**大崎秀雄1、山西賢司100、末田玲子3、谷川増実3・13、高山文子100、**【由宇】**蔵田秀夫25、久米泰1、**【市内】**益冨弘人3、友重憲文7、橋本恵子7、松江小夜子1・3、今西桃太郎17・50、上野和平1 **【広島】**升元薫13、**【岡山】**土井フサ子3・13、**【大阪】**池田浩1

●おめでとうございます〔仏壇入仏〕

2月6日　御本尊　半田　幸男 様
お給仕の慶び一入に存じます。

●ご報告いたします

法要余香（報恩講法要　1月23～25日）

令和最初の報恩講。座談会もあり、多くの方々のご尽力により無事勤修することができました。

【講　師】紫藤常昭師、前住職
【参詣者】23日…115名。24日（昼座）89名、（夜座）31名。25日…97名。
【お供え】白田憲光様、大田峻秀様。

総代就任

新しい総代に、郷の「白田憲光」さんが就任くださいました。白田さんは現在、専徳寺倶楽部の会長も兼任くださっています。法義相続へのご助力、何卒宜しくお願い申しあげます。

ご命日：あの人に会いたい

第二回：司馬遼太郎

（小説家、命日・2月12日）

大切な人を思い出すご命日。朝のお仏壇へのお礼が、少し味わい深いものになります。

小説家の中で最も著書が多いといわれる司馬遼太郎。NHK大河ドラマ原作となった作品数も最も多く、『翔ぶがごとく』『徳川慶喜』『功名が辻』『坂の上の雲』等、七作品あります。今年二十五回忌にあたります。

「…この絶対の（弥陀の）光明は天地にあまねくみちみちていて、その意志（本願）は、人を洩れなく救って浄土にうまれさせてくださるものだという。この場合、有限者である人間がとなえる念仏は呪文ではなくて、無限者である光明への感謝のことばなのである。親鸞の思想にあってはいっさい呪術性がなく、つよくそれを排除している点、（キリスト教の）プロテスタンティズムに似ている。鎌倉時代というのは、一人の親鸞を生んだだけでも偉大だった。」

（司馬遼太郎『この国のかたち』一、181頁）